

芭蕉と寿貞・次郎兵衛

大内, 初夫
佐賀竜谷短大助教授

<https://doi.org/10.15017/12374>

出版情報 : 語文研究. 4/5, pp.79-86, 1956-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

芭蕉と寿貞・次郎兵衛

大内初夫

「寿貞は翁の若き時の妾にて、とく尼になりしなり。其子次郎兵衛もつかい被申し由。浅談」。

一
広島の俳人風律の『小ばなし』の右の文が、明治末年に紹介されてから今日まで、寿貞尼内妻説については多くの説が発表されてゐる（註1）。それらのうちで代表的なものは、芭蕉が二十才の頃に寿貞と相知り、その間に桃印・次郎兵衛・まさ・おふう等の四人の子供が出生したと考へられた頼原退蔵博士の所説（『芭蕉・去来』）。寿貞は「客扱に馴れた女性」と見、芭蕉の京都放浪中に關係が生じ、次郎兵衛はその間に生まれた子と推定された志田義秀博士の所説『問題の点を主としたる芭蕉の伝記の研究』等であり、これらによつて一応寿貞の問題は解決されたかの觀を

呈した。だがなほこれらの説にしても、納得し難い問題を含んでをり、所謂寿貞及びその他の系累についての問題は、資料が極く僅かで限定されてゐるために、最後の解決は心証に委ねる外はなく、中には極端な想像説をも生む事にもなるのである。

例へば岡村健三氏は、最近『芭蕉と寿貞尼』（昭和三十一年三月発行）と題する一書を出版し、内妻説を全面的に否定して、寿貞を芭蕉の甥桃印の妻とし、次郎兵衛・まさ・おふうを、寿貞と桃印との間に出来た子供として考へてゐられる。その論拠とするところは、野坡と風律との間に深い交渉があつたとは考へられないとして、聞書としての『小ばなし』の真实性を疑ひ、又、当時の飛脚便の日数等から伊賀念仏寺過去帳記載の「松營寿貞」を別人と見、更に芭蕉が寿貞歿後間もなく伊勢參宮を志してゐたことから、

寿貞はその妻とは考へられないとし、且、桃印病歿前後から、急に寿貞等の名が芭蕉の周囲に現れて来ると云ふこと等である。

この岡村氏の著書は、甚だ示唆に富んだ面白いものであったが、その所論には従ふ事が出来ない。第一に岡村氏が云はれる野坡と風律との関係にしても、昨年広島での俳文学会の折に展覧された風律宛の二通の野坡書簡や、その他の事から考へても、彼等の仲は相当親密であつたやうであり、野坡の談が風律の手によつて書留められたことは、寧ろ当然な事とさへ思はれるのである。又、『小ばなし』から酒堂の高宮治助、史邦の大久保荒右衛門と云ふ通称を挙げ、『小ばなし』の真实性を疑う手懸りとしてゐられるやうだが、周知のやうに当時の俳人達は多くの通称を用ひてゐる。——岩波庄右衛門・河合惣五郎などと名乗つた曾良の如きその好い例であらう。だからその通称の一つを証すべきものを、現存の文献の上に見出す事が出来ないからとて、『小ばなし』の真实性を減ずることにはならないであらう。かの酒堂の高宮姓の如きは、最近九大杉浦正一郎教授が入手せられた日田連中宛の酒堂書簡に使用されてゐるものである。この点、『小ばなし』の資料的価値を疑はうとする岡村氏の立論は、可成り恣意的便宜的な臭ひが強く感ぜられる。『小ばなし』は聞書として勿論誤りもあるであらう。

だが、当時漸く世人の尊崇を集めてゐた芭蕉の、これ程重要な事柄がさう易々と聞き誤られるものとは思はれない。

なほ、岡村氏の所説について私見を述べさせて頂きたいが、本稿は書評を事とするものではないので、次に寿貞・次郎兵衛についての愚考を記すことにする。

二

さて、こゝで再び巻頭に掲げた『小ばなし』の説を振り返つてみよう。文末に記されてゐる「浅談」と云ふのは、筆者風律の師である浅生庵野坡の談と云ふことである。野坡は俳諧七部集の第六『炭俵』の撰者であり、同集の素竜序に「此集を撰める孤屋・野坡・利牛らは、常に芭蕉の軒に行かよひ、瓦の窓をひらき、心の泉をくみしりて云々」と見える如く、芭蕉晚年特に親炙した俳人である。だから芭蕉の私的生活、最後の深川庵住生活のことなど可成り詳しく知つてゐたであらうと思はれるし、この寿貞に関する一節も、恐らく事実を伝へたものであらうと考へられるのである。

ところで前述した如く、寿貞に関する資料は僅少で書簡三通・遺書一通・発句一に過ぎない。(註1)だからこれらの資料によつて芭蕉と寿貞の関係を説いたとて、先人

の轍を踏むことになりはしないかと恐れる。で、私はこゝに次郎兵衛を手掛りとして、芭蕉と寿貞尼との関係が如何なるものであつたかを解明してみようと思ふ。

次郎兵衛は其角の「芭蕉翁終焉記」に「寿貞が子次郎兵衛」と記されてゐて有名な人物であるが、志田博士はこの「終焉記」の記述には意味深長なものとされ、そこから「それには次郎兵衛が寿貞の子であるといふ事は、芭蕉と特別な関係のある者といふ事を暗示する意味のあるもの」とより考へやうがないであらう。云ひ換へれば、次郎兵衛は寿貞の子で同時にそれは寿貞と芭蕉との間の子であるといふ事を想像させる事である。」(『芭蕉の伝記の研究』)と、次郎兵衛を芭蕉の実子と推定された。頼原博士も次郎兵衛を寿貞と芭蕉との間の子として考へてゐられるやうである。(『芭蕉・去来』)。

ところでこの「終焉記」の記述には、志田博士が云はれる如く、果して意味深長なものがあるのであらうか。それについて先づ次郎兵衛に関する資料を眺めてゆかう。

(前略)桃印勸兵衛無事次郎事等委伊兵衛申上候ゆえ略之申候。苔翠・夕菊・道意・々因へも申届候。宗波息災二候。(後略)(元禄三年九月廿六日付・芭蕉宛曾良書簡)。

これは元禄三年九月、当時故郷伊賀上野にあつた芭蕉に宛

てて江戸の曾良が書送つたもの。文中の次郎事とあるのが次郎兵衛のことと思はれる。又、文中の桃印と勸兵衛は同一人か、或は別人か明らかでないが、高野山大学の荻野清教授は「桃印こと勸兵衛」の意に解してゐられる(三省堂「芭蕉講座・書簡篇」)。桃印は芭蕉の猶子で(註、猶子と云ふのは当時甥の意に使はれてゐる)、結核で元禄六年三月末に三十三才で歿した人物である(註2)。そして伊兵衛(猪兵衛とも書く)も亦芭蕉の甥と伝へられる者であり、(註3)当時これらの芭蕉の血縁の人々が江戸に住してゐたことが知られるのである。なほ「桃印勸兵衛無事」とわざ／＼報じたのは、既にこの頃、桃印は胸を患つて病床にあつたと思はれる。そして続いて「次郎事」と記してゐることから推測すると、次郎兵衛が桃印の付添ひとして同居してゐたのではないかと思はれる。それらの事どもについて伊兵衛から芭蕉に書送つたと云ふのであらう。

次に許六の『韻塞』(元禄九年刊)によると、元禄六年五月六日、新弟子許六の帰国に当つて、芭蕉は「例の次郎兵衛を使として」餞別の詞や色紙短尺等を許六に贈つたと云ふのである。これによるとこの頃、既に次郎兵衛が芭蕉庵に同居し、芭蕉の走り使ひなどをしてゐたことが窺はれる。そしてこゝに『小ばなし』の「其子次郎兵衛もつかひ

被^レ申し由^ノの言葉が思ひ出されよう。この『小ばなし』の書方は、実手を身近において召使ふ意味ではない。寿貞の子を同居させて、走り使ひやその他生活の扶けに召使つたと云ふ意である。『小ばなし』の「芭蕉の妾云々」に注意する人々が、何故この点を見落すのであらうか。なほ、この三月に桃印は芭蕉庵にて病歿してゐるが、恐らく一月末か二月初め、桃印の病状悪化につれて他の場所から草庵に移したものである。その時、次郎兵衛も付添ひとして共にこゝに移り、桃印歿後も芭蕉の手助けとして、そのまゝ庵においてゐたのであらう。

それから同じ六年のものに、

(前略) 当夏暑氣つよく、諸縁音信を断、初秋より閑閑、二郎兵へハ小料理ニ慰罷有候。夏中ハ筆をもとらず、書にむかはず、昼も打捨寝くらしたる計ニ御座候。(元禄六年十一月八日付・曲水宛芭蕉書簡)

と初秋の「閑閑」の折の様を報じた芭蕉書簡がある。不断は俳人達の応対に忙しい次郎兵衛も、「閑閑」中は暇で「小料理ニ慰」んでゐると云ふのである。「小料理に慰」むと云ふことは、京大野間光辰教授の御教示によれば、諸芸の一つとしての料理庖丁の嗜みを意味するとの事である。

次に次郎兵衛の名前が見えるのは、元禄七年、芭蕉の最後の行脚の折のものである。つまり次郎兵衛は江戸から芭

蕉に同行したのであつた。この旅中のものは数も多いので便宜一括して掲げる。

(A) はこねまで御大義忝、次郎兵衛も少学問致候よし申候へとも、漸々草臥之躰又々申候。(後略) (元禄七年五月十六日付・曾良宛芭蕉書簡)

(B) (前略) 二郎兵へ道中達者ニ而、拙者苦勞ニもなり不申、能つとめ申候。(同年閏五月廿一日付・伊兵衛宛芭蕉書簡)

(C) (前略) 貴様御帰り之日ニ御書付、道々も二郎兵へと申やまず候。(中略) 三日二良兵衛足をやすめ、(註、大井川の出水で三日間島田の如舟亭に留つたこと。) 拙者も精氣をやしない、幸の水ニ出合候。二良兵へ少草臥付申候処、三日やすみ候ニ達者ニ成候而随分つとめ候。され共もどり馬あまりやすきニハ壺里半式里計づのせ申候。尾張いせ地にかゝりてハ、肩もあしも共二つよく成申候。初旅奇特ニつゞき申候。(後略) (同日付・曾良宛芭蕉書簡)

(D) (前略) 二郎兵へ其元へ下候へ共、盤子(註、支考)素牛(註・惟然)と申兩人一所ニ付添為^レ申候而、不自

由成事無^レ御座^レ候間、御氣遣被^レ成間敷候。盤子ハ伊勢山田を仕ふ^レ候而小庵を結候よし、近々申来候故、伊勢下りかゝ^レり為^レ申候へ共、先修行の爲且ハ二郎兵へ帰り候迄ハ、木曾塚無名庵ニ一所ニ相勤申候。(後略)(同年六月廿四日付・杉風宛芭蕉書簡)

(E)素童事取持かね申候。存候とは様子相違御座候。去是も八桑丈了簡おとなしく被^レ申候間、大方調可^レ申候。委桃隣先月二郎兵へに申遣候様に被^レ申候。(後略)(同年六月廿八日付・芭蕉宛杉風書簡)

(A)(B)(C)の書簡は、旅中の次郎兵衛の様子を伝へたもの。特に(C)の「肩もあしも共二つよく成申候。初旅奇特ニつゞき申候」と云ふ言葉から、この旅が次郎兵衛にとつて初旅であることが知られ、そこから次郎兵衛が江戸生まれのものであらうと云ふことが考へられる。又、こゝに見られる次郎兵衛に対する芭蕉の愛情に、父子の愛情を認める説もあるが、然し必ずしも肉親でなくとも、一年有餘も同住すれば、そこにかうした愛情が生ずるのは当然な事ではなからうか。

(D)は寿貞歿後のもの。寿貞の後始末に次郎兵衛を江戸に遣はしたことが知られる。「盤子・素牛と申兩人云々」の箇所を、次郎兵衛に盤子・素牛が付添うて江戸に下つた

と云ふ意に解してゐる人もあるが、荻野教授はさうした意味ではなく、二郎兵衛東下後、彼等二人が芭蕉に付添うてゐる意味だと述べてゐられる(「芭蕉講座書簡篇」)。さうすると、一人で江戸に赴いた次郎兵衛の年令の凡その目当がつくであらう。彼の年令について野村一三氏は十八才位(『芭蕉伝記の新研究』)、岡村氏は十三四才位と推定してゐられる。次郎兵衛は(C)から成人ではないことは明らかであるが、道中芭蕉の話相手になる者であり、(E)に見える如く、江戸の俳人達のことを話題にして、桃隣から手紙を送られるほどの者であり、且、前述の「小料理」や江戸行きの事から考へて、十三四才の年令では如何であらう。少くとも十七八才位の者と考へるのが妥当であらう。この点、次郎兵衛を三十三才で歿した桃印の子と見る岡村氏の説はやゝ無理である。

ついで芭蕉の歿後の資料では、前引の其角の「終焉記」や支考の『芭蕉翁追善日記』等がある。『追善日記』は(註4)『愛日記』所収の前後日記の草稿ともなつたもので、筆者支考は大阪行きに伊賀上野から同行した者である。その元禄七年十月廿六日の項に、

正秀の方によりて新式遺言状を封し、從者二郎兵衛をとゝのへて武江にくだらしむ。この者ハミな月の頃母を失ひ、此度ハ主の別をして、又百里の霜雪をしのぎ行のあ

ハれさに、おの／＼はなむけをして泣けるなり。とあり、こゝには明瞭に「従者二郎兵衛」「此度ハ主の別をして」と記されてある。この記述には支考の計らひがあるとは思はれない。恐らく事実を伝へたものであらう。

最後に芭蕉七回忌集『三上吟』の横凡の句を挙げておかう。

かれ尾花のあらましは門人をしのび侍り

次郎兵衛は何あきなひを夷講 横凡

この句は、芭蕉と次郎兵衛の關係をよく知つてゐると思はれる江戸俳人の吟である。こゝに読み込まれてゐる次郎兵衛は、何かの商ひを営んでゐるであらうと推測された者の姿である。多分芭蕉歿後、伊兵衛か杉風等の世話で、何処かの店に手代にでも住み込んだであらうと考へられる次郎兵衛の姿である。序に付言したいのは、最も常識的なことであるが、以上眺めた資料のうち、曾良・許六・杉風・支考等の門人達の次郎兵衛についての記述がすべて呼び捨てになつてゐることである。果して師の子息を敬称もつけずに呼び捨てに出来るものであらうか。これも次郎兵衛を芭蕉の子供と考へることの出来ない一因である。

さて、以上のことから推定されることは、次郎兵衛は芭蕉の子ではなく、当時十七八位の年令であり、芭蕉庵に元禄六年頃から同居して芭蕉の生活の手助けとなり、又、最

後の行脚には従者として芭蕉に同行したと云ふことである。

三

次に、同じく寿貞の子で、芭蕉の子とも考へられてゐるまさ・おふうについて簡単に述べよう。この二人についての資料はこれ亦少く、伊兵衛宛書簡二通と遺書一通と二人の事が見えるに過ぎない。その遺書には「残り候二人之者、十方を失ひうろたへ可レ申候。好齋老など御相談被レ成可レ然了簡可レ有候」とある。仮に二人が芭蕉の実子ならば、杉浦教授の御教示の如く、まさ・おふう宛の遺書でもありさうなものである。又、伊賀の兄半左衛門等にも、二人の將來のことを依頼しさうなものである。それが伊兵衛に宛て、親戚でもない好齋老（註、竹人の『芭蕉翁全伝』には「深川の隠者」とある。）と相談して、適当に世話をしてくれと云ひ残してゐるのである。この点、まさ・おふうは母寿貞と共に、芭蕉が晩年その生活の面倒を見てやつてゐた者とは考へられるが、これ亦芭蕉の実子とは考へられない。なほ彼等は芭蕉歿後如何なつたのであらう。芭蕉の実の子なら門人達が見過す筈はあるまい。野坡の一女政女のことななどを考へてみるといゝ。野坡歿後、彼女は一門の人々

から事ある毎に余緒として引出され、如何に尊ばれてゐることか。封建的な当時として、これが当然なことであらう。

では、次郎兵衛・まさ・おふうが芭蕉の子でないとする

と、寿貞と芭蕉との關係を如何に理解したらよからう。あの寿貞の死を知つて執筆した伊兵衛宛の芭蕉の手紙の、寿貞無仕合もの、まさ・おふう、同じく不仕合、とかく難申_一候。(中略)何事もく夢まばろしの世界、一言理くつは無_レ之候。(元禄七年六月八日付)

尼寿貞が身まかりけるときまで

数ならぬ身となおもひそ玉祭 (有磯海)

の吟に見られる芭蕉の深い悲しみは、寿貞との間が並一通りのものでなかつた事を理解させる。それは甥桃印の妻に對する追悼の氣持などであるわけがない。

ところで『小ばなし』に云ふ「若き時の妾」とは何時頃を指すのであらう。私は次郎兵衛の年令は十七八才位だらうと推定した。とすれば次郎兵衛は延宝五六年頃の出生となる。それ以前だとすると伊賀在國中・京都遊学中等とも考へられよう。然し伊賀の竹人は『芭蕉翁全伝』に「伊兵衛・寿貞なほ尋ぬべし。」と記してゐる。これは故意に筆をばかしたのではなく、事実寿貞について知らなかつたの

かも知れない。故に私は寛文十二年、芭蕉東下後間もなく

寿貞との間に交渉が生じたのではないかと考へる。あの龜

巖居士の去來さへ「具足を売て傾城にかゝつた(丈草の

潘川宛書簡)やうな時代に、三十そこくの『貝おほひ』の

著者芭蕉が、茶屋女と交渉があつたとしても何の不思議も

あるまい。後年支考が「むかし西行・宗祇など、兼好も長

明も、今日の蕉翁も酒色の間に身を觀じて、風雅の道心と

は成給へり。此ゆへに文質も調へり」(『露川責』)と述べて

ゐるのは、その間の事情を伝へてゐるのではなからう

か。そしてその後、寿貞は更に他の男と結ばれ、次郎兵衛

等の子供を設けたものと思はれる。だが寿貞の結婚も不幸

に終つたのであらう。夫に離別し、三人の子供を抱へ、然

も病床の人となつてゐた寿貞を、何かの都合で芭蕉は晩年

面倒を見てやるやうになり、最後の上方巡遊の門出に當つ

て、寿貞・まさ・おふうを芭蕉庵に移転せしめたものと考

へられる。なほ以前私は種々な理由から元禄五六年には寿

貞等が芭蕉庵に同庵してゐたとは思はれず、元禄七年の行

脚の出発に當つて芭蕉庵に移らせたのであらうと云ふこと

について記したが(註5)、次の元禄七年五月十六日付の

曾良宛芭蕉書簡の(註6)

寿貞も定て移り居可_レ申や。申きかせ作_二慮外_一奉_レ頼

候。

の文言は、寿貞等の芭蕉庵移住の時期を推察する上に参考になるものであり、芭蕉の深川出立後、そのあとに寿貞尼達に移つたことは明らかである。

(九六六・三〇)

(註1) 寿貞尼内妻説及び寿貞に関する資料については栗山理一氏の「芭蕉―寿貞尼内妻説―」(「解釈と鑑賞」昭和三十一年八月号)を参照されたい。

(註2) 元禄六年三月廿日付許六宛・同年四月廿六日付荊口宛芭蕉書簡参照。

(註3) 守轍・白亥編『真すみの鏡』(安政六年序)に「但し鯉屋手代伊兵衛ハ桃青翁の甥なり」とある。

(註4) 伊丹市・岡田利兵衛氏蔵。

(註5) 拙稿「芭蕉『閉関』の考察」(「佐賀竜谷学会紀要」第三号・昭和三十年十二月)。

(註6) 「尚古」(第十卷三号・昭和十一年六月)所収。内容から見て真簡と信じてよいと思はれる。

(附記) 去る七月中旬、上方旅行の折、荻野清先生、岡田利兵衛先生に御迷惑をおかけ致しました。本稿を草するに当り資料として使はせて頂いたものもあります。又杉浦先生にも御示教頂きました。記して謝意を表します。

第六号原稿募集

締切 昭和三十二年三月三十一日

(四百字詰原稿用紙二十枚前後とする)

五月下旬発行予定